

2021年12月5日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「黙して待てば、幸いを得る」

聖書：ルカによる福音書1：5～25

アドベントの第二週目を迎える。ルカ福音書のクリスマス物語である。ザカリアは選ばれた祭司として聖所で香をたく。その務めには、宗教的儀式として人間の側が、神を喜ばそうとする業に陥りやすくなる。神に仕え、神に捧げ物や香をたいて神に喜ばれることをするのが宗教であると思いがやすい。しかし神は、ザカリアに天使を遣わす。神のために人間が何かしていくとっていたのに、神の方から近づいてこられたのである。このことは、私たちの住むこの世界に、神の国の業を示していくことを神が決断され、実行したということである。

ザカリアは、天使との突然の出会いに恐れ、告げられた言葉に不安を抱く。聖書に「正しい人」(1：6)と評価されたザカリアにしてこの有様である。所詮人間は、たとえ「正しい人」と評価される者であっても、神の御業を前にすると、そういう人間の正しさはどこかに吹っ飛んでしまうもの。私たちはこの時期、サンタクロースを迎えることは喜んです。それと同時に神を迎えることが出来るか。神を迎えることは、自分が王であることを神に明け渡すことである。

ザカリアは、神の側の御業に圧倒され、ものが言えないほどに驚きを現す。神の御業を自らの事として迎えることへの不安がここに表されている。ただここは、ザカリアが罰として口がきけなくなったというよりも、ザカリアに「黙して待てば、幸いを得る」と、教えたのではないか？ クリスマスは、黙して待つ、神の御業がどのように表されたのか、私たちもしばし黙し、静かに考える時としてキリストの誕生を迎えることが出来ればと思う。

この「黙して待てば、幸いを得る」は、哀歌3章19節以下（旧約 p.1289）に記されている。《苦汁と欠乏の中で／貧しくさすらったときのことを／決して忘れず、覚えているからこそ／わたしの魂は沈み込んでいても／再び心を励まし、なお待ち望む。主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない。・・・主に望みをおき尋ね求める魂に／主は幸いをお与えになる。主の救いを黙して待てば、幸いを得る。》

この時期、キリストの誕生を静かに黙して待つことにおいて、これまでの苦しみや悲しみも、希望へと変えられていく「幸いを得る」ということになる。クリスマスをしばし黙して、待ち望んで行きたい。（神谷）